

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

生徒指導 第62号

一・小・中・高・特別支援学校対象一
平成24年10月発行

児童生徒理解を深める「学校^{たの}しいーと」の活用の在り方

生徒指導を進めていく上で基盤となるのは、児童生徒一人一人についての深い児童生徒理解である。

児童生徒理解のための一方法として、質問紙調査法があるが、県公立学校の約96%の学校が独自に作成した質問紙を用いて児童生徒の実態調査を行っている。しかし、多くの学校が、「活用の在り方」、「適切な設問の在り方」、「分析の在り方」を実態調査の実施上の課題としてあげている。(平成21年度当教育センター調査結果)

そこで、当教育センターでは、児童生徒の学校適応感を把握するために、信頼性と妥当性があり、すぐに指導・援助につなげられる質問紙「学校^{たの}しいーと」を作成した。

本稿では、「学校^{たの}しいーと」の内容構成や実施手順、結果の見方及び活用方法について述べる。

1 内容構成と実施手順

(1) 内容構成

「学校^{たの}しいーと」には、小学生用(1～3年生用)、(4～6年生用)、中学生用、高校生用の4種類がある。

児童生徒が安心して学校生活を過ごし、自己実現を図っていくためには、的確に

児童生徒の適応感を捉え、その状態に応じた適切な指導・援助をしていくことが重要である。

そのため、「学校^{たの}しいーと」は、集団の中での児童生徒同士の関係や、教師と児童生徒との関係、学習に対する意欲面、自己肯定感や心身の状態、学級集団における適応感を把握することができるよう構成されている。

「学校^{たの}しいーと」は、4種類のファイルで構成され、「①児童生徒用配布シート」と「②実施上の留意点」のファイルと「入力集計用シート」として「③学級用ファイル」と「④学年分析ファイル」がある。

「学校^{たの}しいーと」のファイルの構成

ファイルの種類	校種等
① 児童生徒用配布シート	各校種毎
② 実施上の留意点	小学生用 中・高校生用
③ 学級用ファイル (説明, 入力, 個票の各シート)	各校種毎
④ 学年分析ファイル (説明, 学年データ, 学級・学年シート の各シート)	各校種毎

※ 各種ファイルは、当教育センターWebページからダウンロードできる。

質問項目を構成している観点 計26質問項目

- ① 友達との関係
 - ② 教師との関係
 - ③ 学習意欲
 - ④ 自己肯定感
 - ⑤ 心身の状態
 - ⑥ 学級集団における適応感
- 計24質問項目 (各4質問項目)
- いじめに関する質問項目 … 2質問項目

(2) 実施手順

① 「学校楽しいと」をダウンロード



教育センターWebページ「カリキュラムセンター」「生徒指導」から児童生徒用配布シートをダウンロードし、児童生徒数分を印刷する。

2 入力集計用シート(各学年別)			
学級用ファイル (小1~3)	学級用ファイル (小4~6)	学級用ファイル (中1~3)	学級用ファイル (高1~3)
学年分析ファイル (小1~6)		学年分析ファイル (中1~3)	学年分析ファイル (高1~3)

入力集計用シートはダウンロードして保存する。

② 質問紙への記入(児童生徒)

1 学校には、気軽に話せる友達がいる。
 たくさんいる いる 2 3 4 1

2 学校には、悩みや心配を相談できる先生がいる。
 たくさんいる いる 3 2 1 全くない

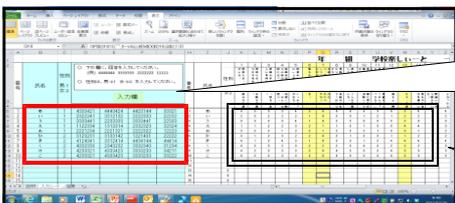
3 学級の中にいると、明るく楽しい気持ちになる。
 とてもなる なる 4 3 2 1 全くならない

質問に対する自分の回答を四つの選択肢の中から一つ選ばせる。

[時間] 小学校1年生は20分、他は10分程度

[留意点] 小学校低学年の場合、教師の質問を読み上げるスピードに合わせて児童に記入させる。また、言葉の意味が分からない場合には、発達の段階に応じて補足の説明をする。

③ 集計入力の記入(教師)

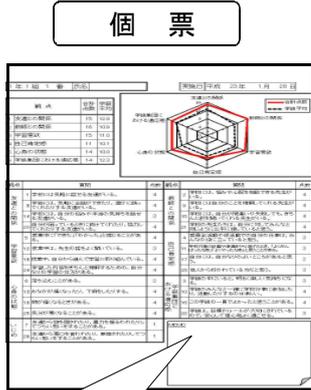


ダウンロードした学級の入力集計用シートの左側に名前と性別、児童生徒が回答した番号を、区切りごとに「4332133」のように入力する。

[入力時間] 1クラス20分~30分程度

自動的に右側のシートに入力した番号が反映される。

④ 結果の出力(教師)

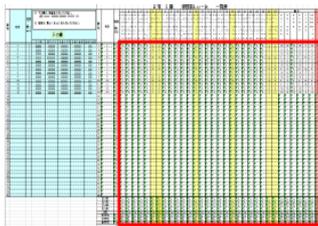


学級全体の特徴と学年全体、県全体の平均を、観点ごとに視覚的に比較することができる。

学級シートに入力をするとき、個人の適応感の状態を示した個票に反映され、出力することができる。

[留意点] 一人分の質問項目26全ての入力がないと個票へは反映できない。

<学年分析ファイルの学年シートを作成するには>



学級用ファイルのデータを学年分析ファイルの学年データにコピー、貼り付けする。

2 「学校楽しいーと」の結果の見方

(1) 個票の見方

図1は、ある中学生の結果を表したレーダーチャートである。この生徒の場合、6観点の中で特に「教師との関係」は高く、「友達との関係」、「学級集団における適応感」、「自己肯定感」が低いことが分かる。

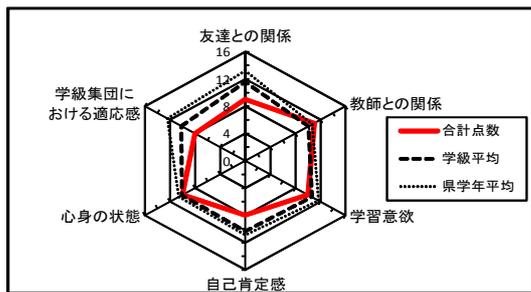


図1 レーダーチャート

質問ごとに詳しく見ると、この生徒は「学級に気軽に話せる友達がない。」と強く感じており、そのことが「学級の中にも明るい気持ちになれない。」ということにつながっている可能性があることが考えられる。従って教師との良好な関係を生かしながら、友達との関係づくりや学級集団における人間関係づくりに視点を当てた取組が必要であることが分かる。

(2) 学級シートの見方

学級の実態については、得られたデータから観点別に平均を求め、学年や県の実態と比較することができる。

図2に示した学級の場合は、「心身の状態」と「自己肯定感」が学年や県平均と比較して低いことが分かる。このように学級の特徴を把握した上で、各観点の高低の要因を様々な視点で検討する。

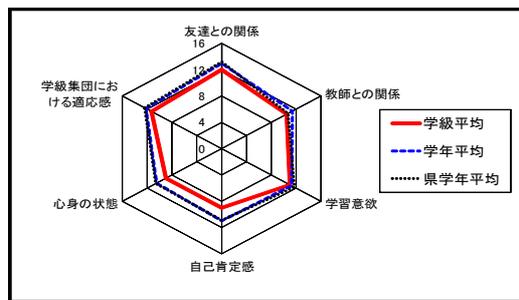


図2 学級・学年・県全体との比較

各観点の結果について、その要因を分析する場合は、日常の観察や他の教師からの情報等を参考にする。また、各項目の結果について、男女別の傾向や点数の高い項目、低い項目に着目して、学年及び学校全体での取組について検討することが考えられる。

3 「学校楽しいーと」の活用方法

(1) 実施時期や実施上の配慮すべき点

実施時期は、調査を信頼性のあるものにするために、学期開始直後や学校行事の前後を避け、児童生徒が比較的落ち着いている状況の中で実施するなどの配慮が必要である。また、実施する際には、配布シートの前文に示されたアンケートの趣旨や留意点を確実に説明するなど、児童生徒が安心して受けられるよう配慮することも必要である。

実施時期	
実施時期	実施理由
[例] 4月下旬 10月下旬 2月下旬	児童生徒（個）や学級、学年（集団）の状態、及び一年間の変容を把握するため
※ 学期1回、学校や学級の実態に応じて行いが、その結果が学級の指導や支援に生かせるような時期に実施できるよう、配慮が必要である。 ※ 気になる児童生徒（個）の状況を把握したり、学級（集団）の気になる雰囲気や状況を把握したりする際には、随時実施する。	

(2) 活用のポイント

ア 組織的・計画的に行う

「学校楽しいーと」を学校全体で、学期1回実施するなど、教育課程に位置付けることで、全職員により確実に実施されることになる。

4月の職員会議での共通理解やPTA総会での保護者への実施説明など、学校全体として、児童生徒理解を積極的に進めていく契機となる。

イ 教育相談と連動する

「学校楽しいーと」を実施した後、その結果を基に、保護者との教育相談や家庭訪問等の場で活用することができる。相談の中で、児童生徒の気になる行動の原因等について保護者と共に話し合ったり、考えたりする機会とすることができる。

その場で、即時に、解決できなくても、これからの日常的な観察の中で、教師と保護者がより意識的に見守っていくことを確認することは、重要な生徒指導の方策となる。

ウ 「よさ」への積極的な関わりに生かす

児童生徒が回答した結果について、特に「高い」項目については児童生徒のよさを表す一つとして、機会を捉えた積極的な児童生徒への関わりが必要である。「褒め、認め、励ます」という関わりに生かしていくことが重要である。

エ 教師間の情報交換に活用する

学年間や教科間において教師同士の児童生徒理解を進めるための一資料として活用できる。

また、生徒指導の事例研修会での資料としても活用可能であり、児童生徒の気になる行動の背景や原因等を理解するための有効な資料として活用できる。

オ 学校種の接続時に活用する

「学校楽しいーと」は、小、中、高等学校が同じ観点で適応感を捉えることができるため、学校接続時の資料として活用できる。

児童生徒の内面を捉える資料は、新しい環境での人間関係づくりや学級編制等にも活用することができる。

イ 個人情報の保護に留意する

「学校楽しいーと」は、児童生徒の内面が把握できる。そのため、学級全員の前で結果を公表したり、他の児童生徒と比較したりすることがあってはならない。児童生徒の個人情報の保護に留意する必要がある。

ウ 継続的な対応をする

「学校楽しいーと」実施後は、継続的な対応をする。結果を分析しなければ、児童生徒が回答したメリットを見い出せなくなる。回答を生かした言葉掛けや教育相談の実施など、継続的に対応することが大切である。なお、教育相談の際には、回答結果自体は保護者に見せずに、教師の手持ち資料として活用するとよい。

エ 絶対視しない

結果を見て、「あの子は、自己肯定感が低い。」などと決めつけることがないようにする。これは、調査をした当時の状況が直接、回答に影響していることもあるため、結果については、その当時の児童生徒を理解するための一資料として捉えつつ、年間を通して適応感をみていく必要がある。

オ 「低い」ことが「悪い」ことではない

調査結果として、「低い、高い」項目が明らかになる。児童生徒理解としてその特徴を捉えることは必要なことであるが、結果が「低い」から「悪い」という捉え方ではなく、児童生徒がどのように「友達関係」や「学級集団における適応感」等を感じているのかを捉え、教師が理解し、適切に対応していくことが求められる。

児童生徒を理解する方法として、「学校楽しいーと」による調査法の他、面接、検査及び観察などがある。児童生徒の実態を踏まえながら、一面的な理解に留まらず、多面的に理解を図っていこうとする教師の姿勢や学校でのシステムが、いじめや不登校、問題行動等の未然防止、早期発見にも大きく役立つと考えられる。

(3) 活用における留意点

ア 日頃からの信頼関係を構築する

信頼性のある回答結果を得るためにも、日頃から児童生徒一人一人の存在を受容し、共感的な関わりをもつなど、教師と児童生徒の信頼関係を構築しておくことが重要である。

【引用・参考文献】

- 総合教育センター 「自己指導能力の育成に向けた組織的・計画的な生徒指導の在り方に関する研究 一実態把握及び年間指導計画の工夫を通して」平成23年 研究紀要
- 総合教育センター：<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/curriculum/seisi/top.html> (教育相談課)